

マルクスにおける自然認識と知識論
加戸 友佳子（神戸大学）

本報告では、マルクスにおける自然認識と知識論が、『学位論文』以後どのように展開したかを考察したい。そのために、『学位論文』・『経済学・哲学手稿』・『ドイツ・イデオロギー』などの初期著作、『資本論』とその関連著作（『経済学批判』・『経済学批判要綱』）、晩年の書簡を対象にしてその変遷を明らかにしたい。

マルクスの自然認識については、多くの研究が国内外で蓄積されてきた。A. シュミットは、マルクスが自然と人間、自然と社会の関係を流動的に認識していたことを示し、この流動性を表す概念「物質代謝」に注目した。椎名重明は、この「物質代謝」の意義を、マルクスに影響を与えた農学者リービヒの思想から跡づけた。J. フォスターは、マルクスが環境問題を「物質代謝の分裂（metabolic rift）」として捉えるエコロジストだったと評価している。

マルクスのエコロジー思想についても様々な視点から検討されている。韓立新などは、マルクスは人間による自然の一方的な「支配」ではなく適切な「制御」を目指してきたと主張している。P. バークットや島崎隆はマルクスの考え方と持続可能性との親和性を見出している。さらに N. Castree や B. Gareau などによる、マルクスのエコロジー思想とアクター・ネットワーク理論との関係の考察もみられる。

以上の研究は、マルクス主義に、自然と人間、自然と社会の相互に流動的な関係を見出している。また、従来のマルクス主義への批判、つまり、人間の一方的な自然支配を肯定している、環境への配慮なしに生産力の発展だけを見ている、といった批判に対し、そうではなくマルクスがエコロジー思想に親和的だったことを示している。

その一方でこれらの研究は、マルクスの考え方が、現在のエコロジー思想を批判する契機を持っていることを十分に明らかにしていないように思われる。

その理由の一つは、マルクスの科学的・哲学的な知識論が自然認識との関係で十分に考察されていないことにあるのではないか。『学位論文』において、自然認識と知識論は強い連関をもっていた。また、自然保護や持続可能性、物質代謝は科学的知識を基に考えられるものである。マルクスの『学位論文』以降の知識論の展開を、自然認識との関連において跡づけた先行研究は、非常に少ない。岩崎允胤と宮原将平は、主にエンゲルスによって展開された弁証法的自然観を現代の科学認識との関連で考察しているが、自然認識との関連は見いだせない。

本報告では、『学位論文』における自然認識と知識論の相互関係が、その後のマルクスの思想展開の中でどのように変化していったかを考察する。それによって、自然と人間、自然と社会の関係についての考察を深めることを目指したい。